

日本駄右衛門

関三十郎

問とほれて名なのるもおおこがこましいが

産えんしゅうれは遠州浜松在

十四じゅうの年ねんから親おやに放はなれ

身みのなりはひも白浪しらなみの

沖おきをこえたる夜働よとらき

ぬぬすみはするが

非道ひたうはせず

人ひとになさなけを掛川かけから

金谷かなやををかけて宿々しゆくしゆくで

義賊ぎぞくととうはさはの高札たかふだに

廻まはるははいふいのの密越たひひししああふふないないその身みの

きやうがひも最早もともと四十しじゅうに人間にんげんの定さだめはわづか五十年ごじゅうねん

六十余州よじゅうしゅうにかくれのねへ賊堂ぞくとの帳本ちやうぼん日本にっぽん駄右衛門だえもん

弁天子僧菊之介

市村羽左衛門

初さて其次そのつは江の嶋の岩本院の児上り

ふだんき着まなれし振袖ふりから鬘まげも

嶋田に由井が濱なみうちこむ

浪なみにしつほりと女に

化ばけて局つゝもたせゆだんのならぬ

小娘むすめも小袋ぶくろ坂に身の

破やぶれわりい浮名うきも

龍たつの口土くちの牢らうへも二度三度

だん／＼越こる島居い敷す

八幡やまはた様の氏子うぢこにて鎌倉

無宿むしゆくとかたがきも嶋しまに育そだて

その名なさへ弁天小僧菊之介すけ

忠信利平

河原崎権十郎

つゞいて後あとにひかへしは月のむさしの

江戸そだちがきの折おりから

手くせがわるく抜ぬ参まゐりからぐれだして

旅たびをかせぎに西国さいこくを廻めぐりて

首尾しゆびも吉野山まぶな

仕事も大峯みねに是を留とどたる

奈良ならの京暮打きょうもちといつて

寺々てら／＼や豪家かうかへ入いこみ盗ぬすんだる

金かねが御獄みたけの罪科つみたがはけぬけの塔とうの

二重にちゆう三重さんじゆうかさなる悪事あくじに高飛たかなし

後あとをかへせし判官はんくわんの名前なまえかたりの

忠信利平たしのぶ

赤星十二

岩井桑三郎

又その次に連なるは以前は

武家の中小姓古主の為に

切どりもにぶき刃の腰越や

砥上が原に身の錆を

とぎ直しても抜兼る

盗心の深みどり柳の

都谷七口花水ばじの

切どりから今半若と名も高くしのぶ

姿も人の目に月影が谷御輿が嶺けふそ命の

明がたにきゆる問ちかき星月夜

その名も赤星重三郎

南郷力丸

中村芝翫

扱さてどんじりに控ひかへしは汐風しほあらし

小ゆるぎの磯馴そなれの松まつの曲まじりり形

人ひとになつたる濱はまぞたち

仁義じんぎの道みちも白川しろがわの夜舟よふねへ

乗込のりこむ舟ふなぬす盗人なみ波なみに

きらめく稲妻いなづまの

白刃はにおどす人ひところし

背負せよつてたゞれぬ罪科つみかは

その身みにおもき虎いへが石いし

悪事あくしに里りといふからは

どつて仕舞しまいは木の空きのそらと覚悟かくこはかねて鳴立なみたし沢さわ

しかし哀あはれは身みにしらぬ念佛ねんぶつきらひな南郷ななごう力丸りきう